

平成30年度自己評価シート（年度末評価）

学校経営目標								
達成目標	評価指標	前年度	本年度		評価	理由	担当部署	
		実績値	目標値	実績値				
1 生徒の人間力を高めるとともに、学力の向上を図り、希望進路を実現する。								
本校の教育活動を通して、生徒の人間力を高める。	学びを通して成長できたと思える生徒の割合(全学年)(%)	94.3	100	92.6	B	目標値を下回ったが概ね達成できた。	全体・学年	
授業力向上に積極的に取り組むことで、生徒の学力を向上させる。	定期考査における活用問題、合教科活用問題においてS・Aを取得した生徒の割合(%)	50.1	50	定期考査 51.2 合教科 30.4	B	定期考査では目標を達成できた。(A)合教科活用問題では、目標から大きく離れた。(C)	教務	
	大学入試センター試験において、卒業生数に占める7科目以上の合計点で全国平均点以上の生徒数の割合(%)	3年	32.8	30	27.0	B	目標値を下回ったが概ね達成できた。	教務・進路指導・教科
	学年の最終の全国模試において、学年の在籍者数に占める偏差値50以上の生徒数の割合(%)	2年	55.7	65	63.9	B	目標値を下回ったが概ね達成できた。	進路指導・教科
		1年	72.6	70	64.6	B	目標値を下回ったが概ね達成できた。	
高い志を持たせ、進路希望を実現させる。	難関国立大学合格者数(人)	5	6	4	B	目標値を下回ったが概ね達成できた。	進路指導・教科	
	卒業生に占める国公立大学の現役合格率(%)	53.6	50	42.1	C	目標を下回った。		

【評価結果の分析】

- 学びを通して成長できたと思える生徒は、全学年で92.6%で目標値を7.4%下回った。
- 学びを通して成長できたと思える生徒は3年生で97.4%、2年生で88.5%、1年生で91.8%であった。
- 3年生の数値は目標値に近いが、2年生・1年生の数値が低い。
- 定期考査における活用問題でS・Aを取得した生徒の割合は、1学期52.9%、2学期49.5%で、平均すると51.2%で目標値に近い数値となった。
- 合教科活用問題においてS・Aを取得した生徒の割合は30.4%で目標値を19.6%下回った。
- 大学入試センター試験における全国平均点以上の生徒数は、58人(昨年度77人)であり、27.0%であった。
- 偏差値50以上の生徒数は152人(昨年度131人)で、昨年度に比べ増加した。(2月進研)
- 偏差値50以上の生徒数は144人(昨年度175人)で、昨年度に比べ減少した。(1月進研)
- 前期日程終了段階で、神戸大学1名、九州大学1名が合格をし、後期日程では神戸大学2名が合格した。(昨年度5名)
- 国公立大学の合格者数は98名であり、卒業生の42.1%であった。(昨年度53.6%)

【今後の改善方策】

- 1年生段階から学年進行で「学びを通して自分の成長」を適切に自己評価できる力を育むために、「総合的な学びのストーリー」を基に、カリキュラムを継続して高めるとともに、実施水準の向上を図る。
- 総合的な学習の時間の学びと教科の学びの連動性を更に高めるために、育成したい資質・能力とその評価を意識した授業を実施し、各教科・科目と総合的な学習・探究の時間における資質・能力の繋がりを意識して、その育成を進めていく。
- 詳細シラバス・授業実践・振り返り・活用問題の繋がりを生徒に浸透させる場面を持ち、定期考査活用問題、合教科活用問題において、活用問題に取り組む意義を生徒が理解して取り組むよう工夫する。
- 授業改善に向けて、相互の授業観察、ビデオ録画、生徒による授業評価などを校内研修に反映させるなど、授業改善方策の向上を図る。
- 活用問題や合教科活用問題の意味や意義を教員がより深く理解する機会を設ける等して、教員の定期考査活用問題、合教科活用問題の作問水準（問題の質）を高める。
- 3学年は教科のバランス、特に理系の受験科目を改善する、2学年は地歴公民、理科を今後強化する、1学年は下位層の底上げをするために、各学年とも教科主任会議や教科会で問題点を整理し、対策を検討する。
- 高い志を持たせ、受験者増を図るために、進路指導の全体像の「見える化」を進め、1年生段階からの取組手順を明確にする。
- 幅広い視野を持たせ、最後まで粘り強く努力させる姿勢を育成するために、より大きな視野から、進路指導の全体像について「見える化」を進めることにより、指導力を高める。

2 地域や国際社会との関わりの中で、豊かな心と社会性を育む。

地域や社会に貢献できる人材を育てる。	美化委員会を中心、生徒が主体的に工夫して清掃活動を行い、清掃点検による点検項目の達成度(%)	90.8	100	95.6	B	目標値を下回ったが概ね達成できた。	生徒指導・保健環境
姉妹校との交流を進め、国際感覚を有した生徒を育成する。	修学旅行などを通して、文化や考え方の違いに対する理解が高まったと感じている生徒の割合(%)	74.6	75	84.9	A	目標値を上回った。	総務

【評価結果の分析】

- 毎月末清掃点検の結果は点検項目の達成度が平均95.6%であった。（5月～3月）
- 教室のゴミ箱のルールを決めて点検活動を実施し注意を促したことが、ゴミの分別の徹底や減量化につながった。
- 姉妹校との交流や修学旅行を通して、文化や考え方の違いに対する理解が深まったと感じている生徒が、1・2年生で84.9%（378人／445人）と目標値を上回った。1年生は77.1%、2年生は92.2%であり、修学旅行での姉妹校を訪問した2年生の割合が特に高かった。また、今年度、姉妹校や海外への短期留学参加者は15名で、留学に関心のある生徒が一定程度いる。参加者の内訳は1年生男子3名、1年生女子5名、2年生男子1名、2年生女子6名であった。

【今後の改善方策】

- 毎月の委員会で報告された清掃点検の結果を確実にクラスで共有させ、生徒が日常の清掃活動を振り返ることができるようにする。
- 月一回の清掃点検において相互点検のやり方を工夫する。
- 次年度は姉妹校からの短期留学生の受け入れが2週間の予定のため、学校全体で受け入れる準備をする。また、留学に関心のある生徒が増えてきているため、姉妹校や海外へ短期留学を希望する生徒に適切な情報提供をする。

3 心身ともにたくましい生徒を育成する。

部活動を活性化し、主体的に考えて部活動に取り組むことができる生徒を育成する。	部活動を通して、計画的に工夫した活動ができたと感じる生徒の割合(%)	81.6	80	86.2	A	目標値を上回った。	生徒指導
学校行事を活性化し、愛校心・所属意識を持った生徒を育成する。	文化祭・大運動会の事後アンケートにおいて、充実感や達成感を感じている生徒の割合(%)	96.0	100	93.3	B	目標値を下回ったが概ね達成できた。	生徒指導

【評価結果の分析】

- 部活動を通して、計画的に工夫した活動ができたと感じている生徒が、1・2年生で86.2%と目標値を上回った（1年87.0%、2年85.3%）。休養日を設定し、活動日・活動時間が減少する中で、より計画的な部活動運営の必要から、生徒達自らが活動成果の向上に向けて組織的・計画的に取り組んでいった結果ではないかと考えられる。
- 文化祭の満足度94.0%、大運動会の満足度92.6%と目標値及び昨年度を下回っている。運営の在り方、ルールの方等、例年と変更した要素が影響したものと考えている。

【今後の改善方策】

- 時間を守る・礼儀・マナーを身に付けるなど、部員主体のミーティングをより充実させることによって、更に部活動参加による充実感・達成感を感じさせていく。
- 本校は部活動加入率が高いので、リーダー養成の手段としての部長会を定期的に開催し、学校全体の取組となるようにつなげていく。
- 行事の趣旨を事前に把握させ、ルール遵守の必要性を徹底させる。
- 引継ぎ事項の確実な確認ができるよう保管場所を明確にする。
- プログラム作成は可能な限り早期に着手し、完成前の点検をクラスで実施できるようにする。

4 働き方改革を推進する。

時間外業務時間の縮減を図ることで職場環境を改善する。	時間外業務時間の県全日制全体の平均を下回る。	—	新規	—	県平均の情報なし。	管理職・総務
	職員個人の時間外業務時間が月80時間を下回る。	—	新規	4月18名 ↓ 12月以降0名	A	目標を達成できた。

【評価結果の分析】

- 時間外勤務80時間以上の教員数が減少した。教職員数49名の内、4月18名、5月12名、6月15名→7月7名、8月0名、9月2名、10月6名、11月3名、12月0名、1月0名、2月0名であった。
- 進捗管理表（全体・分掌・部活動等）を活用した進捗管理が機能するようになったと考えられる。
- 業務改善の方針を明確にし、進捗管理シート等において組織的に取り組む体制を作った。今年度から全県的に導入された勤務時間管理システムにより各教職員が勤務時間を自己管理するとともに、4月～6月において時間外勤務時間が多い教員（単月100時間以上、3か月平均80時間以上）については校長面談を行い、解決すべき課題を明確にした。2学期以降も取組を継続することにより、各教職員が計画的に業務を行う意識をさらに高めるとともに、業務が特定に教職員に集中している場合は校務分掌内や教科内で業務分担の見直しを行う等の工夫を行ったことが改善につながったと考えられる。

【今後の改善方策】

- 次年度以降も見据えた業務改善を実現する体制を確立するため、業務ごとの振り返りを確実にを行う。教職員個々の業務遂行能力を向上する取組を行うとともに、業務分担を学校全体として適切に見直す。
- 年度当初に、新体制で分掌や教科、学年部の業務がスムーズに始められるように、引継ぎ事項を明確にして整理し、引継ぎを行う。

平成30年度自己評価シート（年度末評価まとめ）

校番	33	学校名	広島県立府中高等学校	校長名	村上 悦雄	全日制	本校
----	----	-----	------------	-----	-------	-----	----

1 評価結果の分析

(1) 生徒の人間力を高めるとともに、学力の向上を図り、希望進路を実現する。

a 成果

- 学びを通して成長できたと思える生徒は3年生で97.4%、2年生で88.5%、1年生で91.8%であった。3年生の数値は目標値に近かった。
- 定期考査における活用問題でS・Aを取得した生徒の割合は、1学期52.9%、2学期49.5%で、平均すると51.2%で目標値に近い数値となった。
- 2学年は偏差値50以上の生徒数は152人（昨年度131人）で、昨年度に比べ増加した。（2月進研）
- 前期終了段階で、神戸大学1名、九州大学1名が合格し、後期日程では神戸大学2名が合格した。（昨年度5名）

b 課題

- 1年生段階から学年進んで「学びを通して自分の成長」を適切に自己評価できる力を育む必要がある。
- 総合的な学習の時間の学びと教科の学びの連動性を更に高める必要がある。
- 定期考査活用問題、合教科活用問題において、生徒に活用問題に取り組む意義の浸透を図る必要がある。
- 定期考査活用問題、合教科活用問題の作問水準（問題の質）の更なる向上を図る必要がある。
- 3学年は教科のバランスが悪い。特に理系の受験科目に課題がある。2学年は英数国のバランスは整ってきたが、地歴公民、理科を今後強化する必要がある。1学年は中・上位層は順調に伸びているが、下位層の底上げが必要である。
- 難関国立大学志望者については、高い志を持たせ、受験者増を図る必要がある。
- 国公立大学志望者については、幅広い視野を持たせ、最後まで粘り強く努力させる姿勢を育成する必要がある。

(2) 地域や国際社会との関わりの中で、豊かな心と社会性を育む。

a 成果

- 毎月末清掃点検の結果は点検項目の達成度が平均95.6%であった。（5月～3月）また、教室のゴミ箱のルールを決めて点検活動を実施し注意を促したことが、ゴミの分別の徹底や減量化につながった。
- 姉妹校との交流や修学旅行を通して、文化や考え方の違いに対する理解が深まったと感じている生徒が、1・2年生で84.9%と目標値を上回った。1年生は77.1%、2年生は92.2%であり、修学旅行での姉妹校を訪問した2年生の割合が特に高かった。また、今年度、姉妹校や海外への短期留学参加者は15名で、昨年度同様に、留学に関心のある生徒が一定程度いる。

b 課題

- 毎月の委員会では報告された点検結果がクラスに反映されてない場合もあり、全体として日常の清掃活動に生かされてない。
- 次年度に修学旅行に行く予定の1年生についても、ミリラニ高校の訪問団受け入れ等を通して、国際交流に関心を持たせる必要がある。

(3) 心身ともにたくましい生徒を育成する。

a 成果

- 部活動を通して、計画的に工夫した活動ができたと感じている生徒が、1・2年生で86.2%と目標値を上回った（1年87.0%、2年85.3%）。
- 文化祭の満足度94.0%、大運動会の満足度92.6%と目標値及び昨年度を下回っている。運営の在り方、ルールの在り方等、例年と変更した要素が影響したものと考えている。

b 課題

- 完全下校時間を守ることでできない事があり、中期・長期的な計画だけでなく、一日単位の計画的行動も身につけていく必要がある。
- 引継ぎ事項の不徹底や大運動会プログラム作成時の確認不足など、改善すべき課題があった。

(4) 働き方改革を推進する。

a 成果

- 時間外勤務80時間以上の教員数が減少した。教職員数49名の内、4月18名、5月12名、6月15名→7月7名、8月0名、9月2名、10月6名、11月3名、12月0名、1月0名、2月0名であった。

b 課題

- 年間行事予定表や分掌が所掌する行事や業務が見える化し、計画的に準備や運営を行う必要がある。

【今後の改善方策】

(1) 生徒の人間力を高めるとともに、学力の向上を図り、希望進路を実現する。

- 1年生段階から学年進んで「学びを通して自分の成長」を適切に自己評価できる力を育むために、「総合的な学びのストーリー」を基に、カリキュラムを継続して高めるとともに、実施水準の向上を図る。
- 総合的な学習の時間の学びと教科の学びの連動性を更に高めるために、育成したい資質・能力とその評価を意識した授業を実施し、各教科・科目と総合的な学習・探究の時間における資質・能力の繋がりを意識して、その育成を進めていく。
- 詳細シラバス・授業実践・振り返り・活用問題の繋がりを生徒に浸透させる場面を持ち、定期考査活用問題、合教科活用問題において、活用問題に取り組む意義を生徒が理解して取り組むよう工夫する。
- 授業改善に向けて、相互の授業観察、ビデオ録画、生徒による授業評価などを校内研修に反映させるなど、授業改善方策の向上を図る。
- 活用問題や合教科活用問題の意味や意義を教員がより深く理解する機会を設ける等して、教員の定期考査活用問題、合教科活用問題の作問水準（問題の質）を高める。
- 3学年の教科のバランス、特に理系の受験科目を教化する、2学年の地歴公民、理科を今後強化する、1学年の低位層の底上げをするために、教科主任会議や教科会で問題点を整理し、対策を検討する。
- 高い志を持たせ、受験者増を図るために、進路指導の全体像の「見える化」を進め、1年生段階からの取組手順を明確にする。
- 幅広い視野を持たせ、最後まで粘り強く努力させる姿勢を育成するために、より大きな視野から、進路指導の全体像について「見える化」を進めることにより、教員の指導力を高める。

(2) 地域や国際社会との関わりの中で、豊かな心と社会性を育む。

- 清掃点検の結果を確実にクラスで共有させ、生徒が日常の清掃活動を振り返ることができるようにする。
- 月一回の清掃点検において相互点検のやり方を工夫する。
- 次年度は姉妹校からの短期留学生の受け入れが2週間の予定のため、学校全体で受け入れる準備をする。また、留学に関心のある生徒が増えてきているため、姉妹校や海外へ短期留学を希望する生徒に適切な情報提供をする。

(3) 心身ともにたくましい生徒を育成する。

- 時間を守る・礼儀・マナーを身に付けるなど、部員主体のミーティングをより充実させることによって、更に部活動参加による充実感・達成感を感じさせていく。
- 本校は部活動加入率が高いので、リーダー養成の手段としての部長会を定期的開催し、学校全体の取組となるようにつなげていく。
- 行事の趣旨を事前に把握させ、ルール遵守の必要性を徹底させる。
- 引継ぎ事項の確実な確認ができるよう保管場所を明確にする。
- プログラム作成は可能な限り早期に着手し、完成前の点検をクラスで実施できるようにする。

(4) 働き方改革を推進する。

- 次年度以降も見据えた業務改善を実現する体制を確立するため、業務ごとの振り返りを確実に実行。教職員個々の業務遂行能力を向上する取組を行うとともに、業務分担を学校全体として適切に見直す。
- 年度当初に、新体制で分掌や教科、学年部の業務がスムーズに始められるように、引継ぎ事項を明確にして整理し、引継ぎを行う。

平成30年度学校関係者評価シート(年度末評価)

平成 31 年 3 月 18 日

校番	33	学校名	広島県立府中高等学校	校長氏名	村上悦雄	全・定・通	本・分
----	----	-----	------------	------	------	-------	-----

評価項目	評価	理由・意見
目標, 指標, 計画等の設定の適切さ	A	目標を高く設定し, 高結果が得られるように適切に計画されている。
目標の達成状況の評価の適切さ	A	目標設定が高いため厳しい自己評価となっているが, 高い目標を示して取り組むことで, 生徒の成長は実績値に表れている。
目標達成に向けた取組の適切さ	A	「学びと成長のストーリー」に基づいて「自己設計図」を描いて実践できるように, 目標に向けて計画性を持って適切に取組を進めている。
評価結果の分析の適切さ	A	やや厳しい分析結果となっているが, データやアンケートによる客観的な数値を基に適切な評価が行われている。
今後の改善方策の適切さ	A	取組の方向性が具体的かつ明確であり, 的確な改善策が示されている。
総合評価	A	工夫と努力が十分になされており, 評価できる。 全体的に見て取組の高さが感じられる。